

雜誌合同談の内容に就いて

淨瑠璃機關誌の合流は拙者年來の理想にして昨秋東京の同種雜誌主幹者に提唱して其の腹案も略々出来てあつた。偶々福岡八幡の古賀大彌君から東京・大阪・九州の各社を網羅せる合流勸誘狀が來た。拙者は時機到來と一も二もなく賛意を表し此の統制が出来れば古賀君を社長に推舉し、國策に順應、大いに淨瑠璃の鼓吹振興を謀りたいと非常な期待を持ち、古賀君の招きに應じ一月三十日（と思ふ）佐々木旅館に往つた。暫くすると津の子君が来る、稍遅れて文哉君が來た。其の利那一種の雰圍氣が漂ふた。直に辭去せんかとも思つたが、折角の人の好意を無にするは……と話を聞く丈けに止め置かんと決意し、面白からざる空氣の中に古賀君の話を聞いた其の要點は左の如きものであつた。合流勸誘に應じたるもの、淨曲往來・文樂・淨瑠璃雜誌の三者、拒否したるもの太棹・大日本淨瑠璃界。依つて二千圓を以て三社に分配する（買收の意味か）。其の割方は淨瑠璃雜誌千圓。文樂七百圓。淨曲往來三百圓であつた。

これを聞いて拙者は驚いた。同時に妙な雰圍氣は彌々濃厚となり忽ちに廢刊の相談となつた。其れは甚だ露骨になるから預るが……、何も云へなくなつた。故に拙者は最初

の決意通り毫も可否を表せず四百號を發行の上として佐々木を辭したが、古賀君並に他の二君の眞意が解せぬ。併し歸路文哉君には古賀君が二千圓出す事は大金ではあるまいが、輕舉損をさせる事ありては濟まぬから、名譽を汚さぬ様に十二分の注意をして、慎重を加へねばならぬと云ふて別れた。

翌日某親友に此の話をすると拙者の危險感も彼も直感すると同時に、往來誌は昨年夏以來の休刊で歲末には既に廢刊の通知に接して居るから、雜誌としては生命のなきものたる説明を聞かされたれば、二月三日古賀氏に對して以上の事實を陳べ合流談中受の事を申送つた。其の故は斯る錯誤が基礎にある事は甚だ精神的に傷くるものあり、將來面白からざる結果を齎すであらう。然らば往來社を除いて文樂社と合流せんとするも全然主義主張を異にするものの合流は絶體に出来難く、譬へ出来ても僅かに二社の合流では何等の意義を爲さない、殊に老齡の拙者が若人と伍するなど、既に試験済の拙劣を繰返すは古賀氏並に兩社の忍び得ざる所なればなり。

最初全國的少くも四五社の合流らしく見へるから賛意を

表して置きしも、僅かに右の三社を合併するのみでは國策順應も何もなく、寧ろ營業權蹂躪に類した恐るべき過誤が包藏されてあるかの如く感じた爲に右の照會である。

之に對して古賀氏は「前略本日にかけて御信書二通拜讀仕り候、御說御尤もと存候何れ本月上阪の豫定云々」(二月五日)付。古賀氏は斯の如く拙者の言ふ所を諒解されてある。

其の後古賀氏に岡山でも拜顔したるも會談の好機を得ず大阪で會見の約束して別れた、然れども拙者は不相變東奔西走日も亦足らざる體であるから愛讀者として又文哉君並に拙者の事情を知悉せりと思ふ岡本井筒氏に一切を托して居る事を古賀氏に通告し會談を願つて置いた。

古賀氏は岡本氏と會談して下さつて拙者の意思を能く諒解し下さつて居るものと確信して居ります、此の如き過誤の事體は成立するものでないのが則ち淨瑠璃精神である。

是より先き文哉君は「昨年末諸方面に來て居る往來社の挨拶狀は正に廢刊の通知書である事を拙者に語つて居る、而して文樂社も府の官憲から廢刊の注意を受けて居る事を言明して居る。これにより拙者が一種の雰圍氣といふのも何も彼も明かに解釋する事が出来るに至つた。同時に拙者が全國的合流を欲する信念と大なる逕庭あるを諒得する事が出來た。それ故拙者は右の合流談に對し自然心境に變化を來し、淨瑠璃精神の眞髓に従ひ實踐躬行せんとする篤實

家に之を譲り吾笑死すとも斯道擁護の方法なきやを考へざるを得ざるに至つたのであります。漸くにして四百號を記念とし更に内容外觀に改善を加へる事に決定し一意藝術報國に邁進する覺悟で居ります、これが拙者最後の御奉公にして、又多年のお馴染みに甘へ一層の御支援御鞭撻を願ふ譯であります。苟くも斯道の機關を以て任する者は朝三暮四、讀者を弄ぶが如き振舞を慎み、内外の完備せる物を作る心掛けがなくてはならぬと思ひます。嘗て東京の某君に會談の際、机上なる六七種の淨瑠璃機關誌の批評が始まり慚愧顔をあげ得ざりし。就中一二の物は文章、批評等稍たすかるも、他は番組の編輯で書いてある事は何やら分らぬ、機關誌たるの價值何處にありやと問はれた時は穴へも入りたくなり座に堪へなんだ。君は老齡！四十有餘年の歴史ある日本最古の雜誌なれば衆の模範となり斯道のために奮闘努力せよと大目玉を頂戴し引下つた事があります。

駒、土佐、津等の藝豪續々と世を去る、古稀を超ゆる拙者は急ぎ自ら骨を埋むべき方途を求めねばならぬから自然若人と一緒に進まれない事を悟つた、依て本誌の爲に協心戮力下さる同人、及び多年の讀者諸氏とも協議を遂げ最安全且つ淨瑠璃發展の良途を選び單獨直前したいと存じます茲に合流談の成行と内容を報告し御後援を願ひます。

浪花名物淨瑠璃雜誌社長 樋口 吾笑